

88 レオナルド・フジタが暮らした最後の家 (2021年11月18日)

エコール・ド・パリを代表する画家のレオナルド・フジタ (藤田嗣治) (1886-1968) は、フランスで活躍した日本人の中で最も有名な人物の一人です。フジタは、日本とフランスのいずれにおいても戦争を体験し、生涯で5人の女性を愛し、晩年にはフランスに帰化しました。フジタが妻の君代とともに生活した最後の家が、パリ中心部から南西約30キロに位置するヴィリエール=バークル (Villiers-le-Bâcle)に残されています。



Nu couché à la toile de Jouy
(Musée d'art moderne de la ville de Paris)
寢室の裸婦キキ (パリ市立近代美術館蔵)

藤田が初めてフランスの地を踏んだのは、1913年でした。藤田のフランス生活は、パリのモンパルナスから始まりました。そこで、当時モンパルナスで生活していた巨匠のパブロ・ピカソや親友のモディリアーニと出会うという幸運にも恵まれました。しかし、第一次世界大戦が始まり、フジタの画家としてのキャリアは困難なスタートとなりました。最も苦しいときは、暖をとるために自ら描いた絵を焼いてしまったこともありましたが、絵を描くことを止めることはありませんでした。フジタは自分なりの独特のスタイルを求めて1919年に初めて裸婦を描き、これが「乳白色の肌」と呼ばれたフジタの作品の始まりとなりました。次第に画家としての地位を認められ、1929年に完成したパリ国際大学都市の日本館に、「欧人日本への渡来の図」と「馬の図」を収めました。
(<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100197262.pdf>)

第二次世界大戦が勃発し、1940年に藤田はフランスを離れざるを得なくなり、日本に帰国しました。しかし、戦争で揺らぐ日本社会に馴染めず、フジタは1950年にフランスに戻りました。フランスに骨を埋める覚悟を決めたフジタは、1955年にフランス国籍を取得して日本国籍を抹消しました。1959年にはランス大聖堂で受洗し、レオナルド・ダ・ビンチにちなんで、洗礼名をレオナルドとしました。

そして、フジタは、1960年10月、73歳の時にヴィリエール=バークルに一軒家を購入し、翌年に転居しました。この近くにあった友人の家を訪ねた際にこの地域を気に入ったことから、知人に依頼してこの地域で家を探しました。静かな環境にある住居兼アトリエで、フジタは制作に没頭しました。このフジタの家は、

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

当時のフジタ夫妻の生活の様子を残した姿で一般公開されています。一階 (rez-de-chaussé) と二階 (1er étage) が住居で、屋根裏のアトリエにはフジタが使った筆とパレット、日本語が書かれたシールが貼られた顔料の入った瓶やミシンなどが残されています。フジタが、1966年にランスに建てたフジタ礼拝堂（平和の聖母礼拝堂）に描かれたフレスコ画の習作を見ることができます。

フジタの家にいると、まるでフジタがつい昨日までここで絵を描いていたような感覚を覚えます。フジタの家で、晩年のフジタがどのような思いで絵画を制作していたのか、想像してみてもいいのではないでしょうか。



フジタの住居兼アトリエを管理するエソンヌ県議会 <http://www.Essonne.fr> (仏語)
フジタ礼拝堂 <https://musees-reims.fr/fr/musees/la-chapelle-fujita/> (仏語のみ)

